

家族構成

妻、長男夫婦、孫娘、計五人

(岩手県 田辺 壮久)

私の抑留生活

岩手県 佐藤 竹男

私の抑留生活は横道河子から始まったと言える。牡丹江の部隊を未明に撤収（退却）し、夜が明けると間もなくソ連機の機銃掃射の波状攻撃を受け、部隊は蜘蛛の子を散らすように大隊編成の隊列が中隊規模に、小隊規模に、またそれが分隊に、さらに三々五々に、まさに敗残兵となり、路上や山野に屍をさらす戦友たちを何人も目撃した。

この時点で大隊長や中隊長、小隊長からの指揮命令は届かなくなり、私たちは銃だけは手放さず、おもいおもいに三人五人と組み線路沿いを逃げた。私たち敗残兵はハルビンへ向かった。関東軍はハルビンに集結してソ連軍に大攻撃をかけるということであった。今

思うと単なる噂かソ連軍の諜報活動ではなかったかと思う。

途中鉄橋が爆破され首まで水につかたりしながらたどり着いた所は横道河子であった。ここでの生活は短かった（二―三日くらい）。三々五々になった関東軍（敗残兵）を編成しなおすだけであった。小さな部屋に十人二十人とすし詰めで暮らしたのである。しかしここでの生活は初年兵時代とは全く変わり、ピンタはなく私達はのんびりとした生活を送った。

ここでは日本とソ連は停戦協定が成立して一週間、十日間くらいでウラジオストクから帰国できるとの話で持ち切りであった。しかし帰国「ダモイ」はこの日から死語となり、昭和二十三年秋に引揚船山澄丸に乗船するまでソ連に騙され続けた。

横道河子での生活も短く、ある日一日がかりで私たちの部隊（石井大隊）は移動した。もちろん徒歩であった。そこは旧関東軍のある輜重部隊の兵舎であった。ここでも短い生活だったが、横道河子よりさらに私たちにとってはのんびりした生活であった。この兵舎に

は食べられる大豆、豆かす、トウモロコシ、高粱などがあり、あまりひもじい思いはしなかった。部隊と隣接する満人の畑から大豆やトウモロコシをとって食べたものである。しかし満人達が発砲してくるので命がけでもあった。かつての関東軍全盛当時とは主客逆転である。

ある日突然ここを出発した。この行軍は私の捕虜生活でも忘れがたいものであった。一言で言うなら死の行軍と言ってもそんなに過言ではないと思っている。

一日約五十軒、途中二十四時間の休息日があったものの、朝は夜明けと同時に歩きだし、夜は二十三時頃までフラフラになりながら、気力というか無口で無表情で生ける屍のごとき状態で歩き通したものである。途中で何台もの軍用トラック（アメリカ製）が私たちを次々に追いついて行った。荷台には私たちと同様敗残兵がぎっしりと乗り込んでいた。疲れきった私たちは、うらやましいと思ったことは今でも記憶に新しい。

日没と同時に野営である。着のみ着のまままで天幕なしの野営である。幸い水や薪があるところであ

れば炊事も短時間でできるのであるが、水汲みに片道二十分も三十分もかかったり薪探しに時間がかかれば、夕食を食べて翌日分の朝食と昼食の準備まですればたいてい一睡もしないまま出発する日も一度ならずであった。当然行軍中眠りながら歩くことも珍しいことではなかった。水を汲むのは馬や戦友たちであるう死体が浮かんでいる河の水である。炊き上がった飯の表面は泥が浮き上がり、それをすくいながら食べたことも思い出される。はなはだしい睡眠不足のため小さな石ころやへこみにもよろけたり、前後隣りの戦友とぶつかったり、小休止の声がかかり休むときは牛馬の糞があるうが水溜まりがあるうがそこをよける力もなく座りこみ、出発の声がかかって戦友たちに声もかけずに歩き始めるのであった。

途中二十四時間の休息日があった。この休息日には何度目かの武器検査があり、隠していた時計も万年筆も取り上げられた。通訳を通して申し入れたが、ついに戻らなかつた。それは私ばかりでなかつた。監視兵の中には腕時計を二つも三つも、中には足首にまでつ

けていたソ連兵もいた。

ソ満国境を越えて最初に着いた所は草原といった景色で、小高い丘陵がある原っぱが果てしなく続く所であった。戦友たちの話を照合すると、ここはソ満国境の近くで、昭和十六年の関東特別大演習に備えてソ連軍が対峙した横穴式の兵舎だというのである。当初とんでもない所に来たという不安と、これから先どうなるのか、日本へ帰れる日はいつ来るのかといったその日暮らしであった。最初のラポータ（労働）は草刈りで、果てしない地平線がどこまでも続く地の果てといった寂寥感が体中に広がる草原であった。その草刈り作業はつらいものであった。作業は長時間労働のため喉がとてと渴いた。

朝、夜明けと同時に狩り出され、太陽が地平線に沈むまで（沈んでもしばらく）働かされ、作業中の喉の渴きは文字では表現し切れない程つらいものであった。草は夏の間刈り、それから乾燥し集め、冬湿地が凍結したところでトラックで運搬するのである。

私は冬のトラックの上乗り中に手足が凍傷にかかっ

てしまった。トラックには積めるだけ積みロープをかける。収容所へ帰る最後のトラックなので、ロープにつかまり振り落とされないようにするものだから、手足（特に指先）を凍傷予防のため絶えず動かすことができず手足の指先が凍傷にかかってしまった。幸い手の方の指先は元通りに戻ったが、足の指先、特に左足第二第三はひどく、冬の入浴は苦勞している。湯につけたり戻しながら、徐々に暖めながら時間をかけるのである。その度にシベリアでのトラックの上乗りを思い出すのである。

また、夏の間刈り集めた乾草の山（一山）を、冬のプレス作業時に監視兵の来ないのを幸いにひと山燃やし尽くしてしまった事があり、収容所長から嚴重注意されたうえ、黒パンを百グラム減らされた事があった。支給された黒パンの紛失事件、分配をめぐるトラブルが日常茶飯事的な一時期もあった。したがって黒パンの受領には、当番の外に監視が一人とそれをまた監視する一人、つまり二人が左右について受領したのである。猫、ネズミも食った。蛙などは上等の食べ物だっ

た。食べられそうな物は何でも食べた。わらびの根は冬なので掘ることができないので茎を煮たが、全く食べなかつた事も思い出の一つである。白米が支給になつたときも分配し、一粒単位の分配ができなくなると小刀で一粒の米を切り割って分配をしたのであつた。暗い穴ぐらで煤で顔が真っ黒で目だけがキラキラ光り、大の男たちが米粒を分配する当番の手元をまじろぎもせず見つめる真剣なまなざしも鮮やかによみがえるのである。また、スープを分配するときは、マスですくう人ともう一人スプーンの具が片寄らないようにかき混ぜる専門がつき、息を殺して監視したのである。

最初の収容所では国境に近いということもあって逃亡の話で持ち切りではあつたが、年を越す頃はそれ程でなくなつた。最初の冬は数人が亡くなつた。朝点呼に出てこないのを見ると死んでいた。冬場の土葬は穴が掘れず、雪をどけて枯草をかけその上に雪を乗せるだけであつた。冷たい雪の下で誰にも看取られず異境の地で死んだ戦友たちに対し、今は哀惜の念はもちろん、無念さ、淋しさ、恨みつらみは山ほど高く海ほ

ども深いものである。しかし五十年ほど前の私たちは、次々死んで行く事実に対して（私自身も）何らの感情がわかず、むしろその日に亡くなつた戦友の分、黒パンが増量になることへの期待だけだつた。今考えてみると何という悲しい事であらう。必ず無事に日本へ帰国しようと話し合い励まし合つてきた戦友の死を弔うどころか、黒パン一かけらの増量を期待する本能だけの人間状態だつたことを今再び思うとき、私は慙愧の念にも近い心情になるのである。土を掘ることができず雪だけかけて葬儀を済ました遺体は今どうなっているだろうか。

幸い命運よくながらえて今日現在満ち足りた年金生活に恵まれていることに、全身全霊をあげて山野川草に眠る戦友たちに感謝するものである。私にできることは何かと今でも考え続けている。

この収容所を移動し、小さな収容所を二カ所三カ所移動して、最終の収容所はコムソモリスカヤであつた。翌年秋つまりダモイの時まで三年数カ月になるわけだ。収容所の設備も電気も水道も一通りはついていた。収

容人員は一時四千人くらいいたという話であった。周囲は三メートル以上の柵で、正面ゲートと四隅には望楼があり二十四時間ソ連兵の監視が厳しかった。隣の兵舎には小隊規模くらいのソ連監視兵がいた。ときどき収容所内にソ連兵が来て、時計や万年筆はないかと物々交換に（黒パンを持って）やって来たりもした。コムソモリスクの収容所では様々な重労働をさせられた。

・ 建築現場での雑役。ソ連人の手元、資材の運搬や重量物の移動。練瓦積みの手元では、腰が痛くなる程働かされた。ソ連人は練瓦五枚ずつ運ぶ（両手で）のに日本人はなぜ二枚しかできないのかと。「ニハラシヨラポーター（仕事ができない）」と言われ続けた。

・ 一輪車でセメントや砂を運ぶのに、何回かセメントや砂をひっくり返した。

・ 製材工場での運搬では、四人でかつぐ生木の板材で肩骨が砕けそうになるまでかつがされた。

・ 真冬凍りついた貨車の石炭下ろしに真夜中まで働かされた。

・ 煉瓦工場では、粘土の貨車積みのノルマが達成できないで、いつもいつも「ニハラシヨラポーター」の汚名で夕飯を減らされた。

・ 冬の真夜中に起こされ貨車からのセメント下ろしでは、体が凍りつくような貨車の中で口鼻耳毛穴までセメントをかぶり、真冬の冷えとセメントの冷たさで体の芯まで冷えた。あのセメント下ろしは忘れられない。収容所に帰っても風呂があるわけでもなし、長時間眠れなかった。

・ 冬の伐採では木の皮に住みついている白い幼虫探しで、仕事をほったらかしにして収容所の所長にひどく叱られた。

・ 水道管理設工の穴掘りでは、真冬など一・三mどころか一すくいもできず、最低の黒パンが長く続いた。とにかくノルマノルマで随分と追い立てられた。一緒に働くロシア人もノルマには苦しめられた。食事は最低であり労働は最高、まるで人間としての生活ではなかったと今でも確信している。

昭和二十三年に入って春先頃から私たち捕虜に対す

る給与も少しづつ良くなってきた。ソ連の経済も少し好転したらしい。また私たちにも持ち前の技能技術が活かせるチャンスがあった。すなわち召集前の職業調査があり、私の場合旋盤工としての技術が認められたのである。そしてトラクター修理工場へと収容所から毎日通うことになり、しばらくして監視兵がつかなくとも正面ゲートはフリー通行となった。

工場では私たち四人はチームを組んで仕事をした。工場での工作機械は、ソ連が満州から火事場泥棒的に運び込んだ機械で、ほとんど日本製であったので、私の場合操作するのに一つも困らなかつた。ネジ切りなど細かいネジ、太いネジ、自由に切って見せたものだから、「ハラシヨハラシヨ（よろしいよろしい）」で昼食時など黒パンやトマトの漬物、タバコなどもらうのであった。そして帰りはいつも一〇〇％以上のノルマ達成率をもらって帰ったものであった。

とくに夏場から秋口のスチーム暖房用のラジエーターの製作や組立取付（出張作業）では、ソ連の民間人よりはるかに能率の上がる仕事をして「ハラシヨラボー

ター（仕事がよくできる）」で通っていた。また、水道や送風等のパイプ製作では、（カーブや接合部）現図で展開図を引き、切断後の溶接などは我がグループの独壇場であった。トラクター工場への往復や工場での作業ではロシア人たちから「オーチンハラシヨ（たいへんよろしい）」などとほめられ、毎日ノルマ達成率は一〇〇％以上であった。黒パンも二人も三人ものロシア人からもらい、収容所での夕食はおやつ的な状態で、私はタバコは吸わないので、マホルカなどは戦友たちに分けてやった。またルーブルも百ルーブル以上ももらった。（昭和二十三年秋ダモイのとき、日本では使えないと言われ取り上げられた。）

今、私を取り巻いている現実には、食べ物はあり余るほど溢れ暖衣飽食、新聞、TVをはじめ情報過多で溢れ余っている。そして私自身恵まれた年金生活、生活の不安もきつい労働等もない。かつて餓死寸前とも言うべき食糧状態は今では悪夢でしか記憶に残らないのである。

昭和二十年八月の不法なソ連の侵攻により、ソ連機

による機銃掃射で、山野であるいは強制労働で命尽き、悲運にも異郷の地で鬼籍に入った戦友たちに、私は命永らえている今、何をなすべきか自問自答せざるを得ないのである。また哀惜の念断ち難いのである。

【執筆者の紹介】

現住所 岩手県釜石市鶴住居町一五―五三一八
生年月日 大正十三年四月十五日

昭和十四年四月、新日本製鉄株式会社釜石製作所入所。工作課仕施工場に旋盤見習として配属。

昭和十九年九月現役召集、千葉県にある野戦重砲隊に入隊。十月満州東満地区西東安第十七野戦兵器廠二六三四部隊（き）中隊に配属となる。

昭和二十年春、牡丹江に移動する。

復員後の略歴

昭和二十三年復員、入隊前の原職に復帰。職場委員、中央委員。

昭和三十二年専従執行常任委員。昭和四十二年九月

仕施工場復帰。その後支部長等を経て、昭和五十四年六月末日退職。

家族構成 夫婦、長男、嫁、三人の男孫

現在の様子

- ・岩手県釜石市老連理事
- ・市老連鶴住居地区協議会会長
- ・市老連鶴住居清涼クラブ会長
- ・全厚連釜石分会事務局、地区評議員
- ・釜石ふだん記の会会長

（岩手県 田辺 壮久）

敗戦国民の償い

福島県 大室 清

昭和十七年、尋常高等小学校高等科二年生（今の中学二年生）の秋、海軍志願兵募集の呼びかけに応じ受験して、合格となる。翌昭和十八年五月二十日、普通